NEWS 宮崎東 141 号
2022.12
独立行政法人 国立病院機構 宮崎東病院／広報誌

目　次

1．巻頭言：院長のご挨拶
2．第 16 回開放型病院登録医運営協議会の開催
3．医療用下肢 HAL®歩行訓練におけるメディカルケアピットの導入
4．医療安全対策委員会と災害対策委員会合同の研修会
5．赤江まつばら支援学校での講演
6．編集後記

国立病院機構の理念

私たち国立病院機構は、国民一人ひとりの健康と我が国の医療の向上のために、たゆまぬ意識改革を行い、健全な経営のもとに、患者の目線に立って懇切丁寧に医療を提供し、質の高い臨床研究、教育研修の推進につとめます。

宮崎東病院の基本理念

「主役は病める人」をモットーとして患者さんの人権を尊重し、良質かつ高水準の医療を提供します。

巻　頭　言　院長のご挨拶

院長
伊井　敏彦

～令和 4 年を振り返りコロナ後を展望する～

秋晴れの清々しい日が続くなか、60 過ぎのオジサンは病棟屋上までの階段昇降を始めました。松林の向こうに青い海、頭上には澄み渡る空が拡がり素晴らしい環境に恵まれていると感じます。一方我々を取り巻く社会的な環境は難しい状況にあります。コロナ禍については、第 7 波が収まりきらぬうちに第 8 波を迎えています。ワクチンや治療薬の普及と一人一人の順応により、徐々にコントロール可能な病気にはなりつつあると思います。いまだウクライナに対するロシアの侵略戦争が継続中で、核兵器や化学兵器が使われる可能性が消えていません。北朝鮮のロケットマンも元気な様です。飢饉、疫病、戦争がほぼ克服できたかと思われた 21 世紀のスタートでしたが、悲しい歴史は繰り返すのでしょうか。

診療において、コロナは 9 月半ばから 11 月半ばまでに入院 22 名、感染症外来 4 名とやや落ち着いた状況です。ただし職員とその家族の感染は毎週のように発生しており、後ろから矢が飛んでくる状況が続いています。職員と関係者にはワクチンの 5 回目接種を強くお願いします。また感染に心あたりがある方は、遠慮なく PCR 検査を受けてください。罹ることは止むをえませんが、隠すことは罪です。病院としてはインフルエンザの同時流行にも備えてゆきます。感染対策に努力されている職員全員をたたえ、心から感謝します。

9 月からは外来棟の衛生設備の改修が進んでいます。落ち着いてトイレに行けるようになったでしょうか。皆さんの職場環境を少しでも改善したいので、施設、設備については院長や担当部署長に遠慮なく提案してください。研修センターが竣工し、特定行為研修が始まりました。自分のスキルをアップしたい、新たな資格を取りたいという看護師さんは受講を考えてください。来年度には電子カルテ更新、出退勤、勤務時間管理システムの導入を予定しています。ICT 環境もより充実させます。

新任院長、副院長、事務部長もようやく板についたところです。必要とされる人材の確保のため宮崎大学をはじめ関係部署に通う毎日になっていますが、人の確保は本当に難事業です。宮崎に住みたい、宮崎で働きたいという医師がいれば、院長がどこにでも出向いてリクルートします。コロナによる患者の減少や人手の不足から、コロナ後を見据えて近隣医療機関には病床機能を転換する動きがあります。当院ではまず 2 階病棟をコロナ専用病床とした現在の態勢を、一般急性期病床 44 床、結核ユニット 16 床に戻す予定です。患者さんを確保して当院の診療態勢を維持するために、皆さんの一層の活躍をお願いします。

令和 4 年 11 月　院長　伊井敏彦

第 16 回開放型病院登録医運営協議会を開催しました

地域医療連携室長　石山　雄一郎

2022 年 10 月 13 日に当院大会議室で第 16 回開放型病院登録医運営協議会を開催しました。新型コロナウイルス感染症の拡大により、昨年度、一昨年度と開催が出来ない状況でしたが、今年度は 3 年振りに対面での開催となりました。外部からは登録頂いた先生方や看護師さんなど計 16 名、院内からは 27 名の職員が出席し、演題発表や意見交換を行いました。

院長挨拶では、コロナ禍で開放型病院としての機能はおろか、通常の診療機能や患者への対応が危ぶまれる状況であった事、県からの依頼を受けコロナ治療の為の体制整備を行い、感染症病棟での入院治療や感染症外来での診療を行っている事、今後は通常の医療提供体制に戻し、地域の先生方とも密に連携を図りながら診療し、地域医療に貢献していきたい事などの話がありました。

演題発表では、呼吸器内科の松尾彩子医師より「夏に増悪を繰り返す間質性肺炎」と題して症例報告が行われました。間質性肺炎と考えられていたが、経過を追って画像評価すると肺の所見が変化し、最終的に間質性肺炎ではなく過敏性肺臓炎と診断できた症例で、会場からも質問が挙がっていました。続いてがん薬物療法看護認定看護師特定看護師の村上純子看護師より「看護師特定行為研修受講と研修終了後の院内活動について」と題して発表が行われました。研修を受講して、特定行為の手技獲得だけでなく、看護師が患者の病状を臨床推論し、タイムリーに医師に報告する事によって、診療の一助となれるよう取り組んでいる事などの話がありました。宮崎県内では当院が特定行為研修施設として 2 番目に認定を受けており、研修体制を更に整備し院内だけでなく院外からも研修受講生を募って、地域で特定看護師が活躍できるような仕組みを構築したいという展望についても話題が挙がりました。

意見交換では、出席された先生方から、紹介先の医師の顔が見えると安心して患者さんを紹介出来ます、宮崎東病院の専門性を改めて理解できたので患者さんを紹介してみようと思います、CT や MRI などの大型医療機器の共同利用でもお世話になっています、などの意見が挙がりました。

医療用下肢 HAL®歩行訓練におけるメディカルケアピットの導入

作業療法士　案納　知久

当院リハビリテーション科では 2022 年 10 月から九州初の導入となる左右独立免荷制御装置(商品名:メディカルケアピット)の運用を開始しました。

メディカルケアピットは医療用下肢 HAL®を用いて歩行練習を行う最新型のトレッドミル装置ですが、通常の左右同時に制御されているトレッドミルの機器とは違い、左右独立した体重を支えてくれる機能(免荷機能)により歩行中のさまざまな動きに対してサポートすることができます。この機能は、体幹の落ち込みや傾き、ねじれや揺れ等を検知すると、ベルトの力でそれらを自動かつ持続的に調整し自然な歩行を支援し、理想的な歩行練習が可能となります。又、医療者側からは、視野が確保しやすく全体を把握しながら歩行分析が可能であること、一定の歩行速度で行えること、新たに設定免荷量というアシストの項目が加わったことをメリットとして感じております。更に、すでに実施した患者さん側からも「歩きやすい」、「まだ歩けそう」との言葉が聞かれ、実際に歩行距離も負担なく伸びており、喜びの声をいただいております。

本邦で医療用下肢 HAL®は 2016 年に神経難病である 8 疾患(表 1 参照)に対して医療保険収載が認められました。HAL®歩行訓練を行う上での身体機能の目安としては自立、介助又は歩行補助具を使うことで 10m 以上歩行可能な患者さんとなっております。

①　脊髄性筋萎縮症	②　球脊髄性筋萎縮症	③　筋萎縮性側索硬化症
④シャルコー・マリー・トゥース病	⑤遠位型ミオパチー	⑥封入体筋炎
⑦先天性ミオパチー	⑧進行性筋ジストロフィー	

表 1. 医療用下肢 HAL®歩行訓練適応疾患

また 2022 年 10 月末に、HTLV-1 関連脊髄症(HAM)に対して、医療用下肢 HAL®歩行練習の適応追加申請が承認されたとの報告が、サイバーダイン社からプレスリリースされました。来年以降、HAM の患者さんに対しても HAL®歩行訓練が開始できることを嬉しく思います。

今回、メディカルケアピットといった最新機器を取り入れ、今後もより良い医療を提供し、関係機関の先生方や地域の患者さんのご期待に添えるよう精進してまいります。HAL®歩行訓練に対して適応のある患者様がおられましたら、当院脳神経内科 HAL®外来へお問い合わせください。

＜歩行練習の様子＞

横から見ると
こんな感じ！

後ろから見ると
こんな感じ！

医療安全対策委員会と災害対策委員会合同の研修会

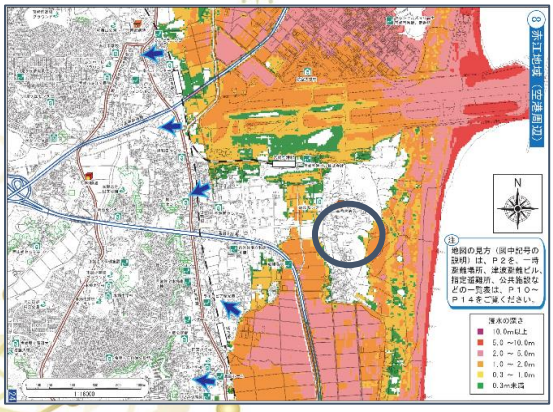
医療安全対策委員会と災害対策委員合同で研修会を行いました。前半は、臨床工学士の長嶺さんから、「災害時予測される医療ガス供給障害と BCP を見据えた対策について」、後半は「職場での被害を少しでも少なくするには。予想される被害とその対策」という内容でした。

①　「災害時予測される医療ガス供給障害とBCPを見据えた対策について」

今回「医療安全管理研修」、「医療ガス研修」を兼ね災害対策委員として「配管設備」や「災害時のライフライン途絶による医療ガスへの影響、備え」について講義をさせていただいた。資料を作成する過程で設備の確認を行ったところ、新病棟建築後の配管設備変更について把握していなかった箇所があり反省する点があった。近年南海トラフへの備えが求められている。幸い当院は宮崎県の「津波ハザードマップ」上では浸水域にはないが、周辺は最大で5m と予想されている地点もある。当院は地域住民の方々の避難場所でもあり、空港からも近いため、被災時は、外来・入院患者様の安全確保と並行して、避難者・傷病者の受け入れを行うことが求められる。

全職員が「医療ガス設備」の現状を理解し備えることは、昼夜を問わず起こりうる災害に対しての「減災」に、そしてその後の「医療事業継続計画（BCP）」へのスタートとなると思う。今後も継続して研修会を行って理解を深めていく必要があることを改めて実感した。

臨床工学士　長嶺　俊克



＜危険個所注目項目＞

- ガラスや鏡のあるところ：病室や自動ドア　戸棚
- 建物の継ぎ目はどこにあるか
- 戸棚やディスプレイ、プリンター、モニター・パソコンなどの落下・移動しそうなものが固定してあるか
- 冷蔵庫等倒れそうなものはないか
- ベッドのストッパーはかかっているか
- ベッドの位置はガラス等から離れているか
- 車いすのストッパーはかかっているか
- ストレッチャーのストッパーはかかっているか
- 消火器の固定されているか
- 通路をふさぐ物はないか
- 書庫や戸棚の上に落下するようなものを置いていないか

②　「職場での被害を少しでも少なくするには。予想される被害とその対策」

病院における地震対策の3つの目的は①病院スタッフの安全を確保、②患者の安全を確保、③震災後すぐに使える、こと。それを達成するために一番身近に行えることは、①動かさないものは固定する、②動くものは簡単に固定できるようにする、③落下しにくくなるように工夫する、④安定した形状、バランスにする、⑤キャスターは原則固定する、ことです。

配布した「危険個所注目項目」を参考にしていただき、もう一度皆さんの職場のチェックを行ってみてください。

災害対策委員会　外科部長　臼間　康博

赤江まつばら支援学校での講演～筋ジストロフィーについて～

脳神経内科医師　　鈴木　あい

7月29日にまつばら支援学校様で筋ジストロフィーについての講演をさせていただきました。まつばら支援学校様との縁は、同校の卒業生が在校時に私の外来通院をしていた事でした。健康診断や修学旅行の注意点などを学校の先生が相談しに来てくださり、熱心にお話を聞いてくださったことを覚えています。そして今回、他の支援学校にもいらっしゃる筋ジストロフィーのお子様の今後や、対応について教えて頂きたいと講演の依頼を頂きました。経緯としまして、「まだ筋ジストロフィーの告知をしていない状態のお子様から、ぼくは歩けなくなるの？死んじゃうのかな？などと聞かれる。どのように返答していったらよいか。症状の進行とともにできなくなることが多くあり、落ち込みが見られるお子様にどのように接したらよいか。という質問を受け、どのように答えたらいいかなど不安に思っておられる先生方が多くいる」ことでした。そこで90分のお時間を頂き、筋ジストロフィーの原因、症状、新しい治療法、遺伝についてお話させていただきました。やや詰め込みすぎた気もしましたが、先生方には最後まで傾聴いただきました。そして、告知されていない中で子供たちに寄り添わないといけない難しさを感じながら、先のような質問に対しては、「死の恐怖を身近に感じてしまうようになった背景を、どうしてそう思うのか教えてほしい、と聞きだしていき、恐怖を感じるようになった原因を一緒に見つめていく。また、できない事も多くあるけれども、まだできることを見つけて伸ばしていくのはどうか。」など私なりの返答をさせていただきました。

学校に通っている筋ジストロフィーの患者様は、脳神経内科ではなく小児科を受診していることが多いため、東病院で学校の先生と連携を取る機会は少ないですが、医療と学校の連携が少しでもできればよいなと感じました。私も、改めて病気の患者さんに寄り添うことのむずかしさ、サポートする際の言葉の選び方等を再認識させて頂く良い機会となりました。このような機会を頂きましたまつばら支援学校様に感謝しております。

移ろいゆく季節

肌寒くなり、秋から冬へと移り変わります。日本の四季は、いつも変わらず巡っていきます。
皆様の心に四季折々の穏やかな時が平等に流れることを祈らずにはいられません。

※季節行事：秋（療養介護病棟）

※季節行事：クリスマス（療養介護病棟）

編集後記

早いもので、あっという間に師走を迎え、宮崎東病院敷地内の木々や草花も冬仕様となりました。冬ならではの澄んだ空気が肌を滑り、息を溶かすようです。四季は順当に巡っており、患者様にも少しでも季節を感じて頂こうと、敷地内のイルミネーションや療養介護病棟での装飾と活動を提供しています。令和4年度第1回宮崎県難病対策協議会研修会にて、名誉院長塩屋 敬一先生による講演が来年1月19日～1月31日の期間でYoutube限定配信（https://forms.gle/aw6KciHhhLsFxzgd6〆切：12/20）されます。知見を深め、今後もより一層あたたかな支援を患者様に提供できるよう努めていきたいと思います。ご興味のある方は是非ご覧下さい。　編集員 N.N

2022 年は、まだまだ落ち着かない１年となりましたが、

2023 年は穏やかな１年となりますように。

みなさまに、幸多からんことを切に祈っています。

宮崎東病院　広報誌編集委員会